政治経済講演會講演集　第五十輯　昭和十二年五

エミリエ・ボスハルト著

シェプランガの教育學の体系的基礎

國政研究會

群馬県立図書館
甲島文庫

7157

注　意　事　項

○資料は大切に扱いましょう。
○資料は転貸借はお断りします。
○15日間の期限に必ず返して下さい。
○資料を汚損または紛失した時は同一の資料又は相当代価を弁償していただきます。

群馬県立図書館
前橋市日吉町一丁目14-8
電話（0272）㉛3008番

エミリエ・ボスハルト著

エデュアルト・シュプランガの教育學の

体系的基礎

S・ヒルツエル書店出版

——（現代哲學の研究とその解説、其十分冊）——

Emilie Bosshart;

Die systematischen Grundlagen der Pädagogik

Eduard Sprangers.

Verlag von S. Hirzel in Leipzig.

(Studien und Bibliographien zur Gegenwartsphilosophie,

zehntes Heft).

12,5,9

No.
10×20
11.11.2000
國政研究會

No.

目次

緒論

第一章　新ヒューマニズム、

一、ゲーテの人間論

二、フイヒテの人間論

三、フンボルト及びシュライエルマッヘルの人間論

四、ヘーゲルの新ヒューマニズム的了史

折柴、

五、デイルタイ及びパウルゼンに於る新ヒューマニズム、

第二章、シュプランガーの歴史哲學的諸前提、

一、主観的行為と客観的規範に依る歴史の構成、

二、歴史的過程に於る主観の自由と拘束

三、歴史的発展に於る人格と文化、

第三章、一般精神科學、

一、精神的存在の諸根本概念、

國政研究會
11·11. 2000
10×20

No.

二、精神的世界の構造、
a、精神行為、
b、精神の規範、
c、精神的世界に於ける價値の措定、
d、精神的世界の哲學的基礎付け、
三、理解、
第四章 精神科學的心理學、
一、精神科學的心理學と精神科學の聯關、
二、人格の解明、
a、タイプの心理學、

No.

b、発達心理学、

c、集団心理学、

第五章 文化倫理学、

一、倫理的な心のの本質。

二、倫理的全体規範。

三、個人の良心。

四、人倫と宗教性。

五、主観の側面に於る倫理的な心のの諸前提。

六、人格倫理と社會倫理。

國政研究會
11. 11. 2.000
10×20

No.

第六章　文化教育學

一、教養

二、教育

三、教師の人格

四、共同体教育

結論　現代精神状況に於るシュプランが

一　文化教育學の地位

（シュプランが一は周知の如く昨年云は

ばナチス・ドイツの文化使節として我が国

國政研究會
11. 11. 2.000
10×20

No.

ヒ来り、以来我が国の各地の大学で講演
筆をなし、自独文化交換に貢献しつつ文
ム人であり、現ドイツ現代の最大の教
育理論家である。本書は純粋に理論的な
ル のであるから、我が国に於ても益々教育
問題が重要性をかへつつある今日、教育
政策を打立てる場合その理論的根據を何
処に求むべきかといふ点に対して本書は
或る示唆を與へるものがあらう。

11·11·2·000 10×20

No. 1

緒論

今日に於ては多種多様の教育理論が存在しているために、教育家は当惑に陥りがちである。

少くとも教育理論を打ち立てる場合、

教育家は如何にすればいいかに惑ふほど多種多様の教育理論が今日存在してゐる現状で立

る。本書はかかる教育界の現状を明らかにせんとするものであって、そのために現代に於

11·11. 2·000 10×20

て支配的な教育家の教育理論の基礎を先づ明らかにせんとするものである。またこの目的を以てシュプランガーの教育學の基礎を明らかにせんとするものである。

シュプランガーは厂史哲學的の立場から教育問題を解明せんとするのであつて、彼は世界及び人間生活を中心にして教育問題を明らかにせんとするのである。教育と云はれるものは單に人生をより善くするためにあるのではなく、教育は人間の本性そのものに根ざ

しておる事柄である。かくしてシュプランガーは二つの中心思想、即ち個性と文化のを中心に教育を説くのである。理論個人としての人間の発展は超個人的な全体の生命と活動に結合されてゐるものであって、個人は全体を離れては生存することができない。反対に超個人的な全体は個人の活動に依って存立してゐるものであって、全体の基礎となるものは個人である。このやうに全体と個人とは相互に結合し、有機的な全体を形作ってゐ

るのである。この有機的な全体は個人の單なる雜然たる寄り集りの如き偶然的なものではなくて、倫理的宗教的な努力に依つて超時間的な永遠の價値たる文化を作り出さんとするものであつて、文化を創造するために結合されてゐる全体である。それ故に文化の創造といふことは個人の義務を考へられねばならないものであつて、かかる文化的使命を果す所にこそ教育の意義がなければならない。教育こそ個人々々の人間をして文化的使命を果

させる任務を有するものである。

このやうなシユプランガーの教育理論を理解するためには、我々は先づ以前の多くの教育家の理論を明らかにしてかゝる必要がある。そのために先づ新ヒユーマニズム時代のデイルタイ及びパウルゼンの教育理論を明らかにする必要があるが、それに先立つて独逸古典主義時代及び独逸観念論時代の大思想家の理論を先づ明らかにしなければならない。

シユプランガーの教育学は文化教育学であり、同時に倫理的道徳的な教育学だと云へる。

そして教育学は何よ
も人間が
先の対象
あるから、
シユプラン
ガーに於
は教育理
論を打ち
てる場合、
人間の能
明が重
な基柄
なりて

第一章　新ヒューマニズム、

新ヒューマニズムは何よりも先づ人間のタイプを改良せんとする教育的意志をもつてゐる。その時代の状態に満足することができず、また人間のタイプに満足することができず、それを改善せんとするものである。このやうにして人間は自分自身を否定し、自分自身を超越し、自分自身を改善せんとする気風が現はれるやうになり、このことが取りも直

さが人間の文化的活動を活潑にする動機となつて来る。文化とは、その広義の意味に於ては、人間が活動的になり自分自身に満足できなくて自分自身を高め向上さす努力に他ならないと云へる。このやうな文化活動があるから之人間は発展し精神的に向上して行くのである。またそれに依つてよりよき世界を作り出されることになるのである。新ヒューマニズムの文化的意志は精神的倫理的道徳的な教育意志である。新ヒューマニズムは人間そのも

のを高尚にせんとするものであつて、從つて精神文化と云はれるものが新ヒユーマニズムの基礎になつてゐる。精神文化に依つて新しいタイプの人間を作り出さんと努力するのが新ヒユーマニズムの根本的な傾向である。このことがまた人間教育の基礎となつてゐるのである。このやうな精神的倫理的道徳的な教育意志が新ヒユーマニズムの文化の基礎をなしてゐるのであつて、それは独逸古典主義時代の詩とか独逸観念論哲学に於て明瞭に覗かは

れることである。それでは具体的にそれはどのやうな形態をとって現はれてゐるであらうか。

一、ゲーテに於る人間論、

ゲーテは[illegible]広汎な文化意識を基礎にして[illegible]人間を論じたのはわかり切ったことであるが、彼はそれを彼の著作「ファウストレとフウイルヘルム・マイス

藝術家として

タールに於て論じた。自分自身を超越せんとするファウストの欲求は神的なものを認識せんとする努力に変り、最後には自分自身神に似た者たらんとする努力に変りて行ったのである。然しファウストに於ては之の努力は報ひられず、絶へず俗世間の之とに縛りつけられて苦しみ憫へた。そして最後にファウストはいくら人間が神に似んと努力してもそれは達し得られるものではなく、人間が向上し発展するのは神の愛の然らしめる所であり、神の

恩惠であって、人間の力に依るものではない
と考へるに到った。それは努力する人間にの
み與へられる神の恵みであると考へるに到っ
た。努力する人間にのみ神の恵みは與へられ
るのであるるか、然しそれは決して永遠に到
達されることなき努力であって、人生その中
のは限りなき努力であると見做された。

二、フイヒテの人間論

フイヒテは行為の倫理的な自律性の上に立つでプロメトイス的な自己意識に依りて新しいタイプの人間を創造せんとした。人間は夫々の性質と能力に応じて益々進歩発達すべきものであつて、人間は善に対して自由でなければならない。人間にとつては、善に対する自由を実現することこそ必要事でなければならない。勿論人間は幸福とか安楽とかその他感覚的な俗世間的な幸福を得んと願ふものであるが、然しそのやうなものを超越してこ

そ精神的自由が得られるのである。精神的自由たらんとする点にこそ人間の特質がなければならない。そして人間には生れ落ちると同時に精神的自由を得んとする性質があるのであって、神の恵みは人間の誕生と同時に與へられるのであり、而も神の恵みは外部から人間の心に與へられるものではなくて、人間自身の心の内部に最初から諸々と生まてゐるのである。フイヒテは云ってゐる、即はち、「汝は汝自身に依って

は存在することはできず、一切は神に依って存在する。神あるが故にこそ汝は高尚な人間にも成れ力強い人間にも成れるのである。然しそれだからと云って行為に於ては汝は神に頼ってはならぬ。行為に於ては汝は、汝を助ける神が存在しないかの如く働け。汝は自分自身の力で行為し働かなければならぬ。」

このやうなことを中心にしてこそ眞の人間教育が存立するとフイヒテは考へた。それ故にフイヒテに於る人間教育の基礎は、人間を行

為へ誘導し、活動せしめる点にある。教育の目的は、人間を絶へざる精神活動へ導く点にある。人間は自発的行為、精神的に自由な行為に依ってこそ眞に教育されるものである。精神活動こそ人間を倫理的道徳的ならしめるものであり、精神活動は道徳に到る道である。

次にフイヒテの教育（人間）の基礎を成すものは眞の宗教である。人間が行為し活動する場合、挫折したり失敗したりすることがあるが、こ

の場合に人間を奮起さし立ち上らしてくれる
此のは眞の宗教を[illegible]おいて他にない。眞の宗
教の力に依りて初めて人間は力づけられ鼓舞
され、自己の信念に向いて邁進することができ
るのである。それ故にこの意味に於て眞の
宗教が教育の基礎になりてゐなければいけな
い。

三、フンボルト及びシュライエルマッヘ
ルの人間論、

・フイヒテの主観的倫理的行為的観念論に対してフンボルト及びシユライエルマッヘルの客観的観念論に於ては美とか眞とか正義の如きイデアの活動が認められる。フイヒテの観念論に於ては自由と行為の問題が基礎となり、従って教育の目的も、人間は如何にしてまた何のために何の教育さるべきであるかといふ点にあつたが、これに対してフンボルトの教育の目的は、個人に於るイデアを活動せしめる点にある。従って人間は自分自身の中に存

在する絶対的なイデアに依って教育されるのである。人間は、歴史とか自然とか藝術とか個人の中に存在する美や眞や正義の如きイデア的なものを観照的に眺めることに依って教育される。それ故にかかる人間教育のためには精神科学が大いに役立ち、精神科学に依って人間はイデア的に目ざめ教育される。更に歴史的及び心理学的研究、生きた人格の考察、言語の研究、これらは個人を教育するに役立つものである。フンボルトにとっては飽くまで

も個人の進歩発達、人格が問題であつたのである。

これに反してシュライエルマッヘルは人格教育以外に共同体或は社會の考へを取り入れた。勿論彼はフンボルトと同じく個人の発達を必要と考へるのはいふまでもなく、個人の人格を重要視した。個人の進歩発達とその完成はいふまでもなく必要であるが、然しシュライエルマッヘルはその他に共同体或は社會の必要なことを認めた。それ故に彼の教育學は二

つの観点に立つてをり、二つの意味を持つてゐるのであつて、個人の人格教育と同時に国家とか教會とか社会の如き生活共同体を中心とした人間教育が中心となつてゐる。教育は人間の夫々の性或は性質を蓄て進歩発展さすためのものであると同時に人間をして社会的倫理的生活に目ざめしめるための心のでなければならない。

四、ヘーゲルの新ヒューマニズム的歴史哲学、

フイヒテの主観的倫理的観念論とフンボルト及びシユライエルマツヘルの客観的観念論とを綜合して厂史哲学的な理論を打ち立てたのがヘーゲルである。ヘーゲルに於てはフイヒテに於るプロメトイス的な創造意志とフンボルト及びシユライエルマツヘルに於るイデヤの活動の理論とが統一綜合され、創造的な行為は絶対者に属するものであると見做されるに到った。この世に現実に存在するのは絶対者又は精神とその活動のみであり、厂史上の

発展も精神の発展に他ならない。精神及び理性のみが現実的であり、また現実的なものは理性的であり精神的である。人間の任務は、かかる理性又は精神を世界歴史に於て認識する点にある。ヘーゲルに於ては個人の自由又は自律性は認められず、個人は絶対的な精神とか理性の云はば手段に利用されるものたるにすぎない。そして人間は理性的精神的な世界歴史を観察し認識することに依つて単に絶対的な精神活動に関與することができるのみ

である。それ故に人間教育の目的は、人間を
して世界歴史の出来事を意識せしめる点にある。

理性的な

五、デイルタイ及びパウルゼンに於る新
ヒユーマニズム、

デイルタイ及びパウルゼンは直接にシユプ
ランガーに影響を與へた人である。パウルゼ
ンは当時の国民運動に関與し、小学校より大

學に到るまで独自の文化生活と文化に依って青年を教育せんとした人である。

デイルタイはシュプランガーに重大な影響を與へた人であって、歴史的意識を国民の間に覚醒せしめた人である。デイルタイは世界歴史を徹底的に解明せんとして、過去の時代意識を追求し探求した人である。デイルタイに於ては人間教育の目的は、世界歴史を文化的に理解し我がものとする点にある。このことが重からして精神科学の基礎付けといふことが重

要な問題となつて来る訳である。デイルタイは厂史的理性の批判に依つて精神科学を認識論的に基礎付けんとしたのである。即は十色々な價値と目的の構造聯関、作用聯関に依つて世界厂史の意味を探求せんとしたのである。そして厂史的世界の基礎は体験であると見做し、精神世界は動かない不動のものではなくて、生成するものであり、体験に於て形作られて行くものであるとなした。体験に依つて我々は精神世界を理解するのであり、

こゝに於て

従って理解の基礎は体験であると考へた。精神科学の基礎となるものは論理的概念的な態度にあるのではなくて、過去の心的状態をその全体性に於て追憶し、体験に依って再発見することにある。それ故に人間にとって必要なことは、過去の歴史的な精神世界を理解と体験に依って建設し直す点にある。かくしてデイルタイに於ては体験、表現、理解といふことが精神科学を形成する際の重要なる基礎と見做されるのである。

第二章、シュプランガーの歴史哲學的前提、

シュプランガーに於てはヒューマニズム的な歴史哲學が一の重要なる要素となつてをり、次に精神科學を客観的に基礎付けんとする努力が見られる。この二つの心の基礎を[illegible]彼の理論を展開して行くのである。それでこの章に於ては先づシュプランガーの歴史哲學的な前提を明らかに

してみようと思ふ。

シュプランガーに於ては前章で述べたやうな新ヒューマニズム的な文化意志が継承され、彼に於ても新しいタイプの人間を作り出すことが文化の使命であり義務であると考へられた。人間の本質的な活動は絶へざる精神的創造でなければならず、自分自身を進歩発展せしめるためのものでなければならない。文化とはれるものはそれ自身独立して考へれば大した意味のないものであって、

人間

個人の生活とか生命を高尚にし高める所に初めて文化の意義が認められるのでなければならない。人間精神の高揚こそ文化の目標であり目的でなければならない。人間は文化的活動をなすことに依って、神に近づくことができるのである。

このやうな理論を展開するに当りシュプランガーは前に述べたフイヒテの自由を精神的な行為の思想、フンボルト及びシュライエルマッヘルの思想、ヘーゲルの思想、デイルタ

イの思想を取り入れ、それらを統一綜合して自己の理論を打ち立てたのである。

一、主観的行為と客観的規範に依る歴史の構成、

シュプランガーの歴史観の核心となるべきものは、絶対者と個人の行為との歴史に於る共同作用の思想である。或る神的なものが客観的な規範となって精神世界に働きかけ、個

人の精神を指導して行くのである。然しこの神的なものは個人の精神の外部に存在しているのではなくて、個人の内部に宿っているものであり、個人の心の中にあって個人を導いて行くものである。従って人間個人の精神の中には神的なものと人間的なものとが内在しているることになるのである。そしてかかる客観的な神的なものに指導されることに依って人間は客観的精神の創造者或は担ひ手となることができ、他人と接触することができる。

このやうにして作り出された客観的精神こそ即ち歴史に他ならない。歴史は客観的精神に依りて構成されるのである。

三、歴史過程に於ける主観の自由と拘束、

前述の如く精神世界の創造に於て永遠の心と時間的なものとが共同作用をなすことに依りて歴史は作られて行くのであつて、歴史の本質は緊張である。歴史の

意味は、個人の精神を進歩発展さし純化する所にある。丁度の舞台に於て人間は自由に活動し自己の[illegible]人生の最高の意味を充実さして行くのでなければいけない。[illegible]こゝにこそ人間主観の自由があるのである。次に

やうにして作られた客観世界或いは文化はそれ自身独立したものとなるのであって、今度は反対に人間に働きかけ人間を拘束するやうになるのである。そして人間はこの客観的精神たる文化との聯関の中に於てのみ進歩発展して行くことができるのであって、人は生

れ落ちると同時に共同体の中へ編入され文化の担ひ手となり、そしてこの文化に依つて教育されて行くのである。個人は一方に於ては文化創造と文化の発展に関與し、他方に於ては文化に依つて規定されて行くのである。

歴史はかかる文化と個人の相互関係の繰り返しに他ならず、そこにまた歴史の発展もあるのである。従つて歴史を離れては何らの精神的発展も考へ得られないものである。その限り文化は永遠の闘争であり、人間にとつて偏

理的道德的意味を有する心のである。

ニ、ナ
史的発展に於ける人格と而文化

人間の精神生活は歴史に依つて制約さ
れ、人間精神の発展は客観的精神

三、歴史的発展に於る人格と文化、

人間の精神は歴史に依つて制約されてゐるのは云ふまでもないことであつて、人間個人の精神の発展は、歴史的に過去のものとなつた客観的精神若しくは文化を眞に攝取し準び取ることに依つて初めて成し遂げられるのである。この点に人間教育の目的も存在する訳である。然しこの予うに人間は過去の文化に依つて制約されるとは云つても、そして教育の

No.

目的は簡單に云へば過去の文化を人間に敎へ込むことであるとは云つてゝ、敎育は人間個人の自発的精神的行為でなければならないのであつて、云はゞ他人の助けに依つて或は他の人の催促に依つて成し遂げられるものでは決してないのである。即ち敎育なるものは、人間が過去の文化を攝取して自己の精神上の敎養を豐富にする点に存在すると同時に、他面人間が自ら進んで自発的に自己の精神を向上さし形成して行く点に存在するのでなけ

一面

ればならないのである。而して前の場合の教育、即はち、過去の文化を自由に摂取して自己の教養を豊富にして行く場合の教育に於ては人間は自由であるが、後の場合の教育、即はち、自発的に自己の精神を形成し発展さして行く場合の教育に於ては、客観的規範的な法則といふものが必要であって、この客観的規範的な法則に自由に服従して行く必要がある訳である。でなければ教育は得手勝手なものとなる危険がある。而してこの教育に依り

これら二つの教育のうち

て初めて個人は道徳的に自由を人格を得ることができるやうになるのである。かかる道徳的に自由を人格を得た人間のみが文化を創造し生産して行く能力を持つてゐる。かくて一般的に云つて、教育の目的は、過去の文化を学び摂取すると共に新しい文化を創造して行く点に立ると云へる。

第三章　一般精神科學、

シユプランが、1は精神的なものの根源を探求することに依つて精神科學を基礎付け、そして諸々の現象をそれに依つて説明せんと努力した人である。それ故に彼に於ては文化[illegible]に携はることが教育の意味であると同時に、客観的精神の本質を認識する点に教育の基礎がなければならないと考へたのである。そして客観的精神を認識するに当りシユプランが

に依れば、客観的精神を存在として認識する場合と当為として認識する場合とがあるのであって、前の場合が精神科学的心理学であり、後の場合が文化倫理学であり人格の倫理学である。文化教育もこの二つに依って夫々違った形態をとらなければならない訳になる。また一般精神科学もこの二つに分類することができる訳である。

精神的

國政研究會

第四章、精神科學的心理學、

一、精神科學的心理學と精神科學との聯関、

デイルタイと同じくシュプランガーも精神科學的心理學を打ちえてた。デイルタイは説明心理學に対して記述的分析的心理學をたて前のものを精神科學的心理學、後のものを自然科學的心理學とも呼んだ。シュプランガーも心理學を精神科學的と自然科學的との二つ

に分け、自然科學的心理學は自然科學を前提とし、精神科學的心理學は精神科學を前提とすると考へた。そして自然科學的心理學は自然と精神との間に因果關係を立て、精神を因果關係に依つて說明せんとするものであるが、精神科學的心理學は心的存在をその志向性に於て記述し、性格付けんとするものであつて、すべての精神科學はこの精神科學的心理學を基礎にしてゐる[illegible]のである。即はち論理學は認識の心理學に屬し、經濟理論は經濟心理學に屬し、美

學は藝術的創造と享樂の心理學に属し、宗教哲學は宗教心理學に属してゐる。このやうにして精神科學的心理學は全体としての個別的精神をその対象とするこしのである。

二、人格の解明、

人間精神の一般的構造を規定し客観的精神を規定する心理學のみでは十分に教育學の基礎が明らかにされない。教育は單に一般的な人

間をその対象とするものではなく、個別的を人間を取扱ふものでなければならない。それ故に教育学の上より見て心理学の最も重要なる使命は個人の解明でなければならぬ。しかくして

ユプランガーは個人を理解し説明するに当り一般的な性格のタイプに依って生きた人格を説明せんとしたのである。かくして人間のタイプの心理学が精神科学的心理学の中心におかれなければならないと考へたのであり、それに依って人間のタイプを解明せんとした

のである。そして人間をその発展、社会性、
丁史性の三方面より説明せんとした。

a、タイプの心理学、

シュプランガーは人間を説明せんとする場合、それを色々なタイプに別けて
それに依って人間を解明せんとした。

こゝでは色々なタイプを如何にして作るか
といふ方法の問題が説かれてゐるにすぎない。

経験的或は帰納的方法 → 農夫、プロテスタント、デモクラート等
演繹的方法 → 理論的、美的、宗教的、経済的、社会的、政治的、

b、発達心理学、

この心理學は人間の生涯、一生を規則的なものに依つて説明し、人間の年令に依つて色々な人生の時期を設け、それに依つて人間を説明せんとする心理學である。然しこユプランがこに於てはこの心理學は青年期の人間を説明するためにのみ用いられてゐる。彼は青年期の人間を最も重要視した。その訳は青年は人生の動揺期に立つてゐるからであつて、教育上最も重要な時期であるからである。次に成長した人間の時期を分けて三つにし、第一は粗材的な破壊的な

時期であり、第二は緩漫な平隠な生長の時期であり、この時期になって人間は文化を理解し始める、第三は意識的な絶つざる目的を持った労作を為す時期である。このやうに三つの時期に分いて人間を説明せんとしたのである。

新しい一個の人間として生れ返った時期であり、

c、集団心理学、

これは精神生活の歴史性と社会性から人間

を説明せんとする心理学である。個人は孤立したものではなく、夫々世界と関係を持つてゐるものであつて、従つて個人を理解するためにはその還境から説明してかゝる必要がある訳である。而してこの還境と云はれるものは丁史的に成つた過去と現在の社会から成り立つてゐるのであつて、この二つのものに依つて個人は成立してゐるのである。それ故に人間を理解するには丁史と現在の生活圏（社会又は）と（而して）から説明する必要がある。過去の文化は丁

No. 48

史に展するものであり、職業、階級、国民、民族は生活圏に展するので之のことを基礎にして初めて人間を理解することができるのである。

以上に述べて来たやうな色々な心理学に依つて人間を理解することができるのであり、人間を生きた全体として理解できるのである。

第五章　文化倫理學、

今まで は精神的世界の構造、人間を説明して来たにすぎないが、次に、個人としての人間及び集団が如何にあるべきであり、如何なることを為すべきかといふことを明らかにする必要がある。文化倫理學はこのことを明らかにせんとするものである。

一、倫理的なもののお質、

倫理学にとって根本的なことは、当為の本質及び根源を明らかにすることにある。従来当為の問題は二つの側面より考され、一方に於ては当為は人間の本性から由来するものであるとされ、人間の眞面目を努力が当為の内容を形作るとされた。他方に於ては当為の根源は人間の外部にあるものであって、客観的な世界の中に与えるとされた。シュプランガーは当為を明らかにするに当り、フィヒテの倫理学の立場を取った。シュプランガ

ーに依れば当為は人間の本性その他のの中に横はつてゐるものではなく、人間の精神の外部に存在してゐるものであり、それ故にこそ当為は心理学に於て取扱はれるのではなくて倫理学に於て取扱はれる問題となるのである。当為は人間の自然的自発的な努力とは違つたものであり、当為は人間の外部に客観的に存在するものである結果、当為は人間の行為を規制し統制するものたる性格を持つてゐるのである。それ故に道徳とか人倫と云はれる

人間の外部に存在する

ものは客観的な原理に依って人間が自分自身を規定する所に存立するものであると云へる。当為は精神的存在としての人間には誰にでも存在しなければならないものであって、如何なる人間の行為も倫理的な意味を持つてゐなければならない。それ故に倫理的なものは人間の生命或は生そのものの一形式であるとも云はれるのである。そして倫理的な当為は人間行為の規範として存在するものである。文化的活動に於ても同じで藝術に活動に於ては藝術的な当為或は規

範があり、政治経済に於ては政治経済的な当為がある。このやうにして倫理的規範は精神的生活の全体を制約するものであり、人間の全精神的活動を規制するものである。それ故に超個人的な全体規範を義務と考へる所に倫理とか人倫とかいはれるものの本質が横つてゐるのでなければならない。而してシユプランガーに依ると全精神的生活の規制は價値の見地に立つことに依つて初めて可能となるのであつて、倫理的全体規範は價値に

依いて基礎付けられるものである。客観的な價値秩序を基礎にして初めて倫理的全体規範の如何なるものであるかが明らかにされるのである。

二、倫理的全体規範

こゝでは倫理的規範は如何にして得られるかといふ方法論を理論的に取扱ひてゐるにすぎない。こゝプランがしに依れば倫理的規範は、個人を絶対的な世界意味の中へ秩序付け

これら五つの倫理的規範の根底には夫々宗教的規範があるのであつて、この宗教的規範こそ客観的價値を作り出すものであると考へられた

るに点にあると考へられた。そして倫理的規範を、経済的、理論的、美的、社会的、政治的の五つに分けた。

三、個人の良心、

個人の良心の当為は、夫々の時代の最高の價値に対して義務を負ふ点にある。人間は良心に依つて自己の倫理的規範を作り出し、それを義務として感ずるのである。それに依つて人間は客観的價値を作り出して行くものである。

四、人倫と宗教、

文化

シュプランガーに依れば人倫或は道徳と宗教とは

密接に聯関するものであって、人倫こそ眞の宗教が来の核心でなければならないと説き、宗教の倫理的性格を前面におし出した。そして倫理を宗教的行為の規範的法則と見做したのである。シュプランガーは世界に意味と價値とを與へる窮局の原理を神と見做した。それ故に世界の意味と價値とを探求せんとする精神の発展は宗教的意味を持つことになって来る訳であって、文化と云はれるものも、精神が最高の價値内容、即ち神を得ん

として努力した結果は創造された
ものに外ならないことになる。神は人間にと
つて力及び推進力として役立つものである。
それ故に、シュプランガーは倫理的創造とし
ての文化活動を宗教、藝術、哲學の三つに分
類したが、藝術及び哲學の根底的には常に倫
理的宗教的な要素が含まれてゐなければなら
ないと考へたのである。なぜなら藝術も哲學
も或る絶対的な神的なものをその対象とする
からである。

五、主観の側面に於る倫理的なものの論前提

シュプランガーに依ると人間倫理は三つの前提を持つてゐるものであつて、即はち第一に自由、第二に倫理的態度に対するエネルギー、第三に体験可能の範囲である。

先づ第一に自由であるか、自由は三つの意味を持つてゐるものである。即はち、行為の自由と意志の自由と内的自由の三つである。このうち第一と第二の自由は社会学的な自由

であり、第三は倫理的自由とも云ひはれる。或はそれらはまた合目的的な自由、心理學的自由、倫理的自由と少し云へる訳である。心理學的自由を意志の自由は云はゞ咨意的な衝動的な自由であつて未だ動物と変らない自由である。倫理的自由は、この心理學的自由が客観的な最高の價値に依つて規定される場合に出て来る自由である。それ故に倫理的自由は客観的な最高の價値法則に依つて規定された自由である。從つて倫理的自由に依つて為さ

れた人間行為こそ本当の意味の道徳的行為と云へる訳である。即ち倫理的自由は当為を知った自由と云へる訳である。このやうにして倫理的自由に依って為された人間行為は何より也文化價値の創造を目的とするものであるが、然しこの両場合夫々の人間の性質に依って文化價値創造に相違が出て来るのは当然であって、こゝに人間のエネルギーが問題となって来る訳である。自己自身を克服し殺し再生さすことが出来る人のみが文化價値を創造することと

こゝに於て

かできることになるのである。即は十分眞に
神的なものを信ずる宗教的な人のみが價値を
創造して行くことができるのである。

六、人格倫理と社会倫理、

シュプランガーが当為を問題とし價値を問
題とする限り、その倫理學は單に個人的なもので
はなく社会的意味を持っているものである。
それ故に倫理的道德的教育學に於ては人格の

そして社会倫理の基礎は愛と権力であると考へた。

みならず社会も取扱ふ必要がある訳である。

個人（人間）は四つの人倫的な生活共同体、即ち、国家、教会、科学、社会の四つの中に従属しなければならないものであって、それに依って初めて人間は文化の担ひ手となることができるのである。このやうにして教育学は個人の人格倫理と社会倫理を基礎にしてゐなければならないことになる。そして人倫的倫理的に自由な人間人格を作る所に教育学の使命があるのである。

第六章、文化教育法、

シュプランガーの文化教育法の根本思想は倫理的宗教的な教育である。教育は全体的な世界観人生観、全体の人生及び世界の意味の中で考へられねばならない。簡単に云へば人間精神の向上といふ点に教育の目的があるのである。そして客観的に最高の價値を基準とした行為に依りて人間に人倫的道徳的自由を得させる点に教育の目的がある。

そしてかかる人倫的道徳的自由を得た人間をして社会的に文化創造を為し得るやうにしてやる点に教育の目的がある。

一、教養、

教養とは、~~人間が~~精神文化を実現する歴史的過程の中へ人間が入って行くことを意味する。今小故教養には精神と文化とが必要である訳である。即ち自己発展せんとする人間主観と客観

的な精神文化とがある所に教養が成立するのである。

二、教育、

教養とは人格の主観的な生成発展過程であるが、教育とは、この教養過程を生長発展する人間に対して要求する所の精神行為である。それ故に教育は常に人生の中心意味に向つてなされねばならず青年を対象とするものでなければなら

ない。教育は単に知識を人間に傳達する任務を有するものではなく、また人間が自己の人格を形成する場合に精神的な指導を與へるためのものでなければならない。即ち知識教育でなると同時に人格教育でなければならない。このために教育は単に學校を中心とした教育であってはならず、客觀的文化を中心とした教育でなければならない訳である。即ち教育は一の文化的活動でなければならない。

三、敎師の人格、

敎師の職業はその人格に關係するのは云ふまでもないことであつて、この與敎師の人格の問題は敎育學上一の重要問題である。シユプランガーは敎師の典型としてソクラテスを考へた。敎師は先づ文化的觀念的な諸々の價値に対する愛を持つてゐなければならず、次に探求的な精神に対する愛を持つた生徒、即はち自らる生徒を愛し進んで物事を探求せんとする精神を持つてゐ

なければならない。教師は文化を創造する必要はないが、既存の文化を理解し愛することをしなければならぬ。そしてこのやうに文化を理解することに依つて自己の精神的生命及び体験を豊富にしなければならない。また教師は自己の人格及び精神が教育されるものの手本となるやうになりなければならない。このやうにして教師と生徒が精神的に相触れ合ふ所にこそ眞の教育が成立するのである。

四、共同体のための教育、

この場合共同体といふのは價値の共同体のことである。客観的に存在する價値内容はすべての人に義務として受け容れられなければならないものであって、それだからこそ共同体には常に統一がある訳である。それ故に教育はまたこの統一に対する義務を強調するものでなければならない。即ち文化的統一に依って人間をして共同体に義務を感ぜしめる点に教

育の使命がある訳である。而してかかる價値共同体の最高のものとしてシュプランガーは国家を考へ、而して また国家を人間教育のための手段と考へた。そして国家教育の必然的要素として権力意志、正義の意志の形成、国民、土地、文化の形成を考へたのである。この他政治教育の核心をなすものとして国語、祖国、自国の歴史的運命、文化を挙げた。そしてシュプランガーに依ればかかる国家教育、政治教育は決して個人の人格を否定するものではな

~~[illegible]~~ く、寧ろ個人の倫理的道徳的人格を高めるものであると考へた。

國政研究會
11. 11. 2000
10×20

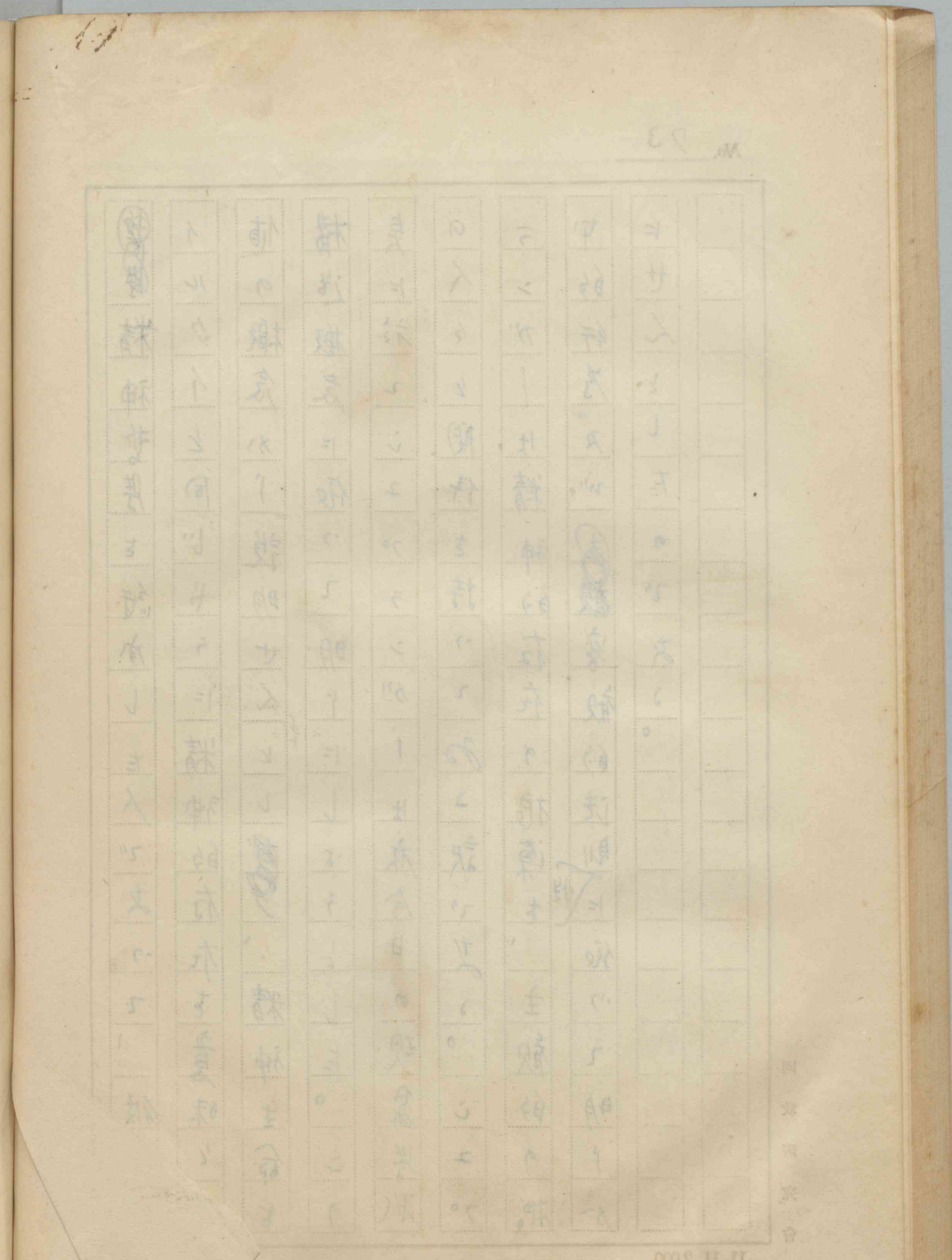
結論、現代精神状況に於ふシユプランが一

教育学の地位、

こゝでは現代の多くの哲学者及びその哲学理論を簡単に紹介し、それらとの聯関に於てシユプランが一の文化教育学を簡単に記してゐるにすぎない。

今日色々な哲学理論が存在してゐる訳で文ふが、そのうちシユプランが一はデイルタイの

哲學精神哲學を継承した人であつて、彼はデイルクイと同じやうに精神的存在を意味と價値の概念から説明せんとし、精神生命を構造概念に依つて明らかにしようとした。この点に於てシユプランガーは亦今日の現象学派の人々と関係を持つてゐる訳である。シユプランガーは精神的存在の根源を、主観的の根本的行為及び客観的法則性に依つて明らかにせんとしたのである。



群馬県立図書館
0707157-4